

印僑

吉田 眞人

東南アジアの国々では華僑が大きな経済的支配力を持っている。私の経験でも、インドネシアとシンガポールのJVの相方は華僑であったし、タイで設立から運営まで関与したJVでは、先方の経営者も事務方も、名前はタイ風であったが、ほぼ全員華僑の人達であった。JVの相方ではないが、会食のご招待にあずかったシンガポール在住のインドネシア華僑の桁外れのリッチぶりについては、去年「年長けて…」で紹介した。

この華僑の更にも上に行く商売上手が、印僑である、といわれている。尤も、この説は、印僑の上に行くのがユダヤやレバシリ（箱に隠れて密出国したあのゴーン氏！）で、さらにその上を行き総ての金を集めるのがスイス人だ、と続くので、小話の類いであらう。

印僑の勢力圏は、インド洋の島嶼国は勿論、多くの東アフリカの国々とされている。実際に現地で見聞いたことはないのですが、実感が湧かないが、最近話題となった事柄に加え個人的な記憶も思い出した。

英国で本年10月リシ・スナクが首相に就任した。初めての非白人且つヒンズー教徒の首相である。インド系の両親のもとイングランド南岸の港町サウサンプトンで生まれた。父はケニア生まれの医者、母はタンザニア生まれの薬剤師で、1960年代に東アフリカから英国に移住している。祖父の代にインドのパンジャブからケニアに移住している。

英国の総人口6800万人のうち、インド系人口は約2.5%を占めるに過ぎない。この少数派の中から首相を輩出したわけで、英国社会の多様性への寛容さと共に、インド系の人々の努力と上昇志向が窺える。

40年近く前のロンドン駐在時代に、秘書を募集した。面接に来た何人かのうちの一人がインド系であった。彼女は生れと育ちがケニアで高校から英国に来たとのこと、非常に判りやすい教科書的な英語を話した。日本の会社にインド人の秘書というのも坐りが良くないと考え、採用しなかったが、国際都市ロンドンを実感した次第である。

(2022年11月24日)